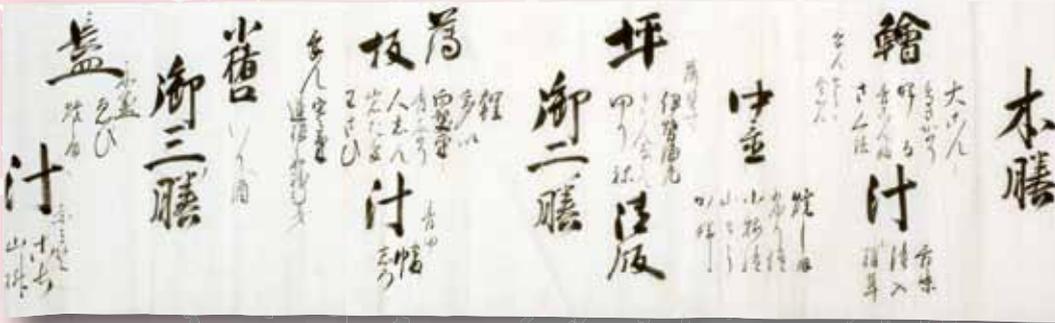


豊田市 郷土資料館 だより

No.75

Toyota City Museum
Of
Local History



享和元年小出家祝言膳献立



上の献立表から復元した本膳料理 (特別展「祝い」より)

目次

- ・民具調査だよりー2 “アンボンタン” は、お利口さん。…………… 2
- ・地中に眠る植物種子…………… 3
- ・火の手から文化財を守る放水銃…………… 4
- ・スクールサポート事業 高橋の歴史を調べてみよう！ー地域学習で高橋中学校と連携ー…………… 5
- ・「祝い」の戦後史ー特別展「祝いー宴・贈り物・芸能ー」に向けて③ー…………… 6
- ・歴史的町並みの保存とまちづくりー伝統的建造物群保存地区制度④ー…………… 7
- ・文化財シリーズ75. 県指定文化財 猿投神社文書…………… 8
- ・資料館NEWS

■民具調査だより-2

“アンポンタン”は、お利口さん。

はじめに

豊田市に限らず、国の方針もあって明治期から昭和の中頃にかけて、日本各地で蚕を飼育し生糸・真綿・絹織物を商品化することが、新たな現金収入源ということもあり盛んに行なわれました。市内の各所の郷土資料館にも養蚕のコーナーが設けられており、桑の葉を収穫する道具、蚕を飼育するための用具、繭から糸をひく機器や真綿をとる道具、機織機など多種多様な民具が展示されていると共に收藏されています。

暖房具

お蚕さんの飼育と上簇^{じょうぞく}はとても手間のかかる大変な仕事であったようで、大正15年発行の小學校農業教科書・下巻にも「蠶^{さなぎ}の發育に最も適する温度は、華氏七十五度前後なり。されば低温のときは火力にて補ひ高温のときは窓・戸・障子を開きて…」とあり、さらに注書に「火気に注意すべし。又華氏十五度以上の保温は、行ふべからず。煉炭を用ふるものは特に有毒瓦斯^{ガス}の發生に注意すべし。」という記述がありました。日本の農家も明治期になって家屋の改造までして養蚕に取り組みました。

豊田市にはこの養蚕に使われる“アンポンタン”と呼ばれる蚕室暖房具があります。素焼きの赤焼きで、胴回りの最大径が350mm～530mm、高さは265mm～300mm、穿かれた直径25mmほどの穴の位置と数もまちまちで同じ型のものはほとんどありません。平均的なサイズは、胴回り外径420mm、高さが270mm、重さが14.5kg。穴の数は14～18個。

この暖房具は明治の後半から昭和の初めの頃まで、床に切った爐と共に使われたと考えられます。当初はイケズミやボロズミなど炭を燃料として用い、大正の中頃からは、火持ちのする煉炭を使ったようです。各所の資料館に、“孔あき煉炭製造器”や“煉炭挟み”が残されています。家庭用としてではなく、蚕室の暖房用として、粉炭に石灰と粘着剤としての赤土の泥を混ぜ、これを突き固め、型からはずし乾燥させ自家で煉炭を造った訳です。

このポットリとした火鉢形の暖房具が、養蚕農家の仕事の中でブームになり、数多く使われたであろうと考えられるのは、多分その価格がそんなに負担にならないものであったであろうということと、爐と違い容



■アンポンタンー 直径440ミリ 高さ290ミリ 14穴 藤岡民俗資料館所蔵

易に移動させられるということにあります。数の増減も出来ますし、とても便利で役立つお利口な道具でした。後に、燃料効率を考慮して考案された煉炭専用のさまざまな“煉炭暖炉”に役目を渡しアンポンタンは姿を消しました。低温で焼成された素焼き製品のため割れやすく、温度の微調整に使う蓋を欠いた物が多く、使用時の正しい姿のまま展示されている物が少ないのが残念でなりません。

何処で造ったか？

この道具の製造地は、常滑系と三州（高浜・碧南）系とに分けられます。常滑系の特徴は、移動させるための指をかける突起物が無く、凹んだ部分に二つの小さな穴がけられており、この穴に針金などを通して把っ手を付けます。私はこれを“ブタの鼻”と呼んでいます。三州系のもは、ブタの鼻に対して“鳥の嘴”のような形の把っ手が付けられています。市内各所で展示・收藏されているアンポンタンは圧倒的に三州系の鳥の嘴型の物です。

呼び名は

そもそもこの蚕室暖房具を、“アンポンタン”と呼ぶのが気に入り調査を始めたのですが、正直よく解りません。ただ足助町にある『三州足助屋敷』の展示物のキャプションには「穴があいていることから⇒間が抜けている⇒アンポンタン（間抜けの意）」と記されています。最後に各地での呼び名を並べておきます。
アンポンタンー豊田市内。豊明市。岐阜県萩原町。アンポンー岡崎市。みよし市。知立市。オンドガメー一宮市。豊川市。オンドバチー南知多町。東浦町。他には、カイクヒバチ、カイクヒイレなど。

（東海民具学会 岡本大三郎）

地中に眠る植物種子

普段人間の目につかない地中にはさまざまな生命が存在します。生命と言えば動物を想像する機会が多いかもしれませんが、植物の種子もその一つです。

種子には最適な環境が与えられればすぐに発芽するものと、すぐには発芽せず、別の発芽の機会を待つために地中で何年も活動を停止（休眠）するものがあります。この後者の種子を埋土種子まいどといいます。

埋土種子は、植物が自身の種を後世につなぐための戦略のひとつです。たとえば、環境変化などの原因で地上に生えていた植物が消滅した場合でも、地中にその植物の種子が生存していれば、いつの日か再び地上に復活することができる可能性が生まれます。また、発芽のタイミングをあえてバラバラにすることで、種の生存率を上げているとも考えられます。

しかし、埋土種子は永久的に地中に生存できるわけではなく、寿命があります。その寿命の長さは植物の種類によって大きく異なりますが、同じ植物の種類でも地中などの環境によって寿命が変化します。

種子が発芽するまでには、種子内部の状態や外部の環境など様々な要因が複雑に関係してきます。発芽できる準備が整った種子が地中や水中に閉じ込められた場合、光の強さや温度、低酸素といった環境条件によって種子の活動が著しく低下、あるいは停止します。このような状態下で種子が生存していれば、植物の種類によってはかなりの長い期間にわたって発芽する力を温存することができます。

植物の種子が長い寿命をもつことが知られた世界的にも有名な例として「大賀ハスおおが」が挙げられます。このハスは、昭和26年に千葉県千葉市検見川の遺跡から発掘されたハスの実を、発掘に携わっていた植物学者、大賀一郎（1883-1964）が発芽・開花させたもので、博士の名をとって「大賀ハス」と命名されました。驚くべきことにこのハスは、同時に発掘された遺物の年代測定から約2,000年以上前のハスであることがわかりました。長い眠りから覚めた「大賀ハス」は、現在も千葉公園などで栽培され、毎年花を咲かせています。

ただし、遺跡から発見された植物種子がすべてこのように発芽するわけではありません。ハスが植物のなかでも比較的長い種子寿命を持つ水生植物であることと、その種子の休眠に適した環境である泥炭層に埋

まっていたことなど、種子が生存できた様々な要因があったからこそ「大賀ハス」は2,000年以上もの間、発芽する力を失わなかったと考えられます。

平成21年、市内の寺部遺跡からドングリ類の貯蔵穴（ドングリピット）が発見されましたが、このようなドングリ類は基本的に寿命が短く、アベマキやオニグルミは一年弱で発芽する力が失われることが知られています。一般的にドングリ類はほとんど休眠しないため、地面に落ちた後のわずかな発芽期間を逃してしまえばそのまま寿命を終えます。そのため、たとえドングリピットからドングリが得られても、「大賀ハス」のように発芽させることは難しいのです。

埋土種子を利用することは、その地から絶滅してしまった植物を復活させるための有効な手段であり、実際に失われた植物群落を埋土種子から復活させた取り組みもあります。こうした取り組みが成功するにはその植物の種子が持つメカニズムを解明することが重要ですが、植物が自然界を生き抜くために備えた種子の戦略は植物の種類ごとに異なるため、その仕組みはまだ完全には解明されておらず、今後の研究が待たれるところです。

【参考文献】

正木隆編（2008）森の芽生えの生態学：文一総合出版，東京
鈴木善弘（2003）種子生物学：東北大学出版会，仙台。
千葉市ホームページ

（西部めぐみ 豊田市史資料調査会）



ドングリ（アベマキ）

火の手から文化財を守る放水銃

豊田市唯一の国の重要文化財（建造物）である足助八幡宮（以下、八幡宮）本殿に、防火設備である放水銃が完備されました。今回の放水銃と同型が設置されたのは、滝山寺東照宮（岡崎市）、鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）、津島神社（津島市）、六所神社（岡崎市）に次いで全国で5例目となります。



放水風景（左側の鉄塔が放水銃）

今回防火設備が完備された八幡宮本殿は、再建・修理の様子を伝える棟札7枚と共に、明治40年5月27日に国の重要文化財（建造物）として指定を受けました。

本殿は、三間社流造檜皮葺きで、妻飾り・象鼻・手挟などの型式が室町時代の特色をよく残しており、中でも向拝の蝦虹梁の手法はとても珍しいものとなっています。また、神社本殿の壁を漆喰塗りにする例は特異で、これは後世、補強のために修理された可能性が高いと思われます。足助の町家建築が安永の大火の後、1階の軒裏や2階の外壁を漆喰で塗籠るなどして防火的な仕上げへと変化していった経緯を考えると、八幡宮本殿の漆喰壁も町家建築の影響を受けたのかもしれませんが。

また八幡宮本殿は、文正元年(1466)に再建されたとされています。屋根については、天和2年(1682)、明和2年(1770)、安政3年(1856)に葺き替えを行っており、年代を並べると、おおよそ100年ごとに屋根の葺き替えを行っていることがわかります。

こうして、度々の改修を経てきた八幡宮本殿は、平成22年度に防火設備として放水銃が設置されることとなったのです。

三間社…間口三間の神社本殿

流造…切妻造、平入り母屋の前に庇を出す造り

檜皮葺き…檜の樹皮で屋根を葺くこと

象鼻…木鼻の一種で、象の鼻を想起させる形に彫ったもの

手挟…肘木と垂木間の三角の隙間を埋める装飾板

蝦虹梁…高低差のある柱間、部材間を繋ぐ虹形に沿った梁

用語解説

今回の工事で、地下式貯水槽とポンプ室を築造し、遠方監視盤にて火を感知したら、消火ポンプを起動させ、境内の放水銃3基を同時に自動放水させることができるようになりました。

ポール式自動回転放水銃3基は、高さが6m、7m、9mと分かれており、各放水銃が150°回転して、八幡宮に万遍なく水をかけられるようになっています。放水量は、3基同時で毎分約2tで、約50分間の連続放水が可能となっています。ちなみに、3基の中で最も高い9mの地点に設置された放水銃は、神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮に続き、全国2番目の高さです。

八幡宮の放水銃は、防火という本来の目的を十二分に果たすと共に、その放水シーンの壮観さには言葉を失い、感動すら覚えるものでした。この放水シーンは一見の価値があります。文化財防火デーや消防訓練時に試運転を行う予定です。

（井上 直己）



足助八幡宮本殿 放水風景

高橋の歴史を調べてみよう!

地域の歴史遺産を授業に

高橋地区は、市内でも史跡や遺跡の多い地域です。しかし、ここに住む人たちは、案外それを意識しないで過ごしています。子どもたちはなおさらで、地元の中学生も教科書に載っている歴史は知っていても、通学途中にある文化財には気づいていません。そんな状況を何とかしたいと、高橋中学校の先生から資料館にスクールサポートの依頼が寄せられました。

高橋ミステリーツアー（学区探検）の実施

地域の文化財をどのように学校の授業に取り入れるのがよいかを事前に打合せました。生徒たちは、夏休みに各自で地域の歴史についてインターネットなどで調べていたので、その中から見学する価値の高い史跡をしまり、まずは自分の目で確かめさせることにしました。

見学する史跡は9箇所、そのうちの4カ所は高橋中学校の社会科担当教員、3カ所は郷土資料館の職員、守綱寺は住職にご案内いただくという、まさに博学連携、地域連携の学習となりました。

生徒たちは、先生の作成したワークシートを手に、クラスごとにローテーションをして半日がかりで見学地を巡りました。



守綱寺の見学

見学地 …曾根遺跡・八柱社古墳・守綱寺・常夜灯
寺部城跡・昌光寺・辻堂・烏帽子岩・神明社古墳

寺部城では、井戸がいくつあるかというクイズを自分たちの足で確かめ、史跡を一通り見回った後で、城についての説明を聞きました。曾根遺跡では、堅穴住居跡を見て、どのように建てられたか考えた後、復元

住居の中に入り、柱の様子や屋根のつくりを確認することができました。



寺部城跡での調査

それぞれの場所で多くの生徒たちは、地域の歴史の奥深さを改めて感じるとともに、歴史学習の楽しさを知り、興味や関心を高めることができたようでした。

学芸員による出前授業

学区探検を終えた生徒たちは、さらに自分で日本の歴史と結び付けて学習を深め、発表会を開きました。その中で、高橋地区が他の地区に比べ遺跡や古墳が多いことに気づきました。

その理由について話し合う授業では、郷土資料館の学芸員をゲストティーチャーとして招き、自分たちの考えを確かめました。電子黒板で地域の地形や遺跡などの分布を確認し、矢作川よりも市木川のような支流に多くの人々が住んでいたことなどが理解できました。また、この地域にはまだまだたくさんの文化財が眠っていることなどを知り、「これからも自分でもっと調べてみたい。」という感想を述べる生徒も多数見られました。

(杉本 満)



電子黒板を使った授業

「祝い」の戦後史

－特別展「祝い－宴・贈り物・芸能－」に向けて③－

「郷土資料館だより」の73・74号で、その計画・準備の過程を紹介してきた市制60周年記念郷土資料館特別展「祝い－宴・贈り物・芸能－」（会期平成23年1月29日～3月13日）がいよいよ始まりました。今回の展示は、祝いの文化を構成する要素を「宴会」「贈り物」「芸能」に大きく分類し、その歴史の変遷を市域の資料を中心に紹介する内容となりました。

今回の展示を計画・準備していく中で、様々なチャレンジを行いました。それは、「より市民にとって身近な、かつ有益な博物館展示とは何か?」と考えると、ころから始まったと言えます。73号で紹介した足助地区の「祝言膳復元プロジェクト」、74号で紹介した「挙母祭りの舞台を訪ねる」など、今回は、展示計画・展示品作成・出品・普及活動などの多くにおいて、市民の方たちとの共働によりその作業を進めました。協力していただいた方々に深くお礼申し上げます。

さて、今回の展示構成で、個人的に最も苦労したものの一つは、昭和20年代後半以降、約60年の祝いの歴史の変容について触れた「現代の祝い」です。近年、高度成長期の生活について、歴史的にスポットをあてる博物館展示が増加してきており、その余波を受けた書籍やTV番組・映画なども増加しています。それらの中で語られる当時の時代像とはどのようなものでしょうか。日本全体が戦後の混乱期や朝鮮戦争による特需景気を経て、大きく経済復興へと舵を切った時代。戦前からの地域社会を維持しつつ、電化製品や食品などにおいて大きく欧米化の波を受けていった時代。そして、誰もが将来に対して希望を抱いていた時代…。何に主眼を置くかによって、様々な「時代像」が考えられますが、いずれの論点においても「幸福な好ましい時代」として注目することが多いのではないのでしょうか。しかし、個人的にはこの時代を経て、「得たもの」について大きく紹介される一方で、「失ったもの」については詳細に検討されることがないのではないかと、という印象があります。

さて、このような問題意識を持った上で、市内における「祝い」の戦後史を再構築する作業を始めました。

最も労力を注いだのは、①聞き取り調査、②祝い事に関わる写真資料の集成、③行政の発刊する定期的な「広報誌」の悉皆調査とデータベース作成、以上の3点です。

①については、堤町・駒場町にお住まいの女性の方々から聞き取り調査を行わせて頂きました。女性という立場からは、結婚式などにおいて「祝われる側」としてのみではなく、家計や宴席を取り仕切る「祝う側」としての視点でも様々な参考になるお話を聞かせて頂きました。②については、樹木町にお住まいの野田孝夫氏所蔵の結婚式写真と、式が行われた場所・会場などを詳細に示した記録メモに出会えたことが、大きな成果につながりました。特に、時代が新しくなるにつれ、A) 新郎新婦の写真、B) 家族・親族等を含めた集合写真、C) 披露宴の宴席写真と、A→Cの順で写真が充実していく点、また、C) の比重が重きを成していくことは、家庭用撮影機器の普及がその背景にあります。ブライダル産業が発展し始める昭和50年代と現在の結婚式の写真でも大きな違いがあり、今後こうした「現代の歴史資料」についても、郷土資料館として関心を払っていく必要があることを痛感しました。

最も多くの時間を費やしたのは③「広報誌」についてです。広報誌は、市域全体でわずかな違いはあるものの、昭和20年代前半から刊行されています。現在行われている市史編纂事業において永年にわたり保管されていた紙資料を画像化したものを、昭和20年代～60年代まで観察し、祝い事に関する記載を抽出し、データベース化しました。特に興味深かったのは、戦後の

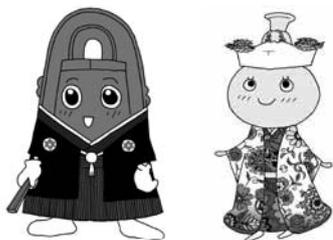


公共施設における結婚式(昭和40年代前半 野田孝夫氏撮影)

婦人会が主導した「生活改善運動」に関わる記事群であり、先の①②と基本的に一致しつつ、より直接的に「祝い」の習慣が変容した理由を描き出すことが可能となりました。この運動では、昭和20年代後半以降、結納や当時家庭で行っていた祝言の宴席について、経費・時間・献立に制約を加える為、積極的に活動が行われました。また20年代末には、貸し衣装などの制度が整備され、30年代以降には結婚式を家庭外で行うことが推奨されるようになり、公民館などの整備が進みました。

このような結婚式の省力化・簡素化は、戦後における女性の人権尊重や農村部の経済的自立を目指した動きと無関係ではありません。宴席において準備などで最も負担を強いられる女性を解放し、飲食費・交際費に偏る農家の経済状況を改善する点においては成果を残しつつ、一方で地域社会の人々が、伝統的な方法で新たな二人の門出を祝う場が失われたことは、記憶に留めておくべきでしょう。

(高橋健太郎)



つ 翻 六 減 残 通 衛 九 員 団 心

午前二時まで披露宴？ 改善に早くも暗い影

結婚式の四、五件を含めて、十二月迄に挙式の判明したものの八件、関係者は、新し

入つて、二

三、四、六日と矢つぎ早に

六日現在、調査した結果は

あやぶまれた通り上出来で

はなかつたものもあるよう

だ。

この運動は七月の末から始

められているのに、以前か

らの支度でやむを得なかつ

くきりか元の時期である今

が一番むづかしいと、改善

に頭をなやませているが、

六日現在、調査した結果は

あやぶまれた通り上出来で

はなかつたものもあるよう

だ。

この運動は七月の末から始

められているのに、以前か

らの支度でやむを得なかつ

だとか、花嫁の到着が遅か
つたので披露宴が午前三時
頃まで延びてしまつたとか
引出物は廃止ということだ
あつたが、お茶菓子という
名目に化けて立派なお菓子
が引かれた等の、ウワサが
改善申合せ事項決定早々暗
い影をなげかけているが、
一日も早く徹底的に実情を
調べ、今後の改善に支障を
なくするよう関係者共同し
て措置を講ぜよとの声も高
い。

旭村公民館報 第20号(昭和26年10月)

歴史的町並みの保存とまちづくり

- 伝統的建造物群保存地区制度④ -

平成22年12月28日に豊田市足助伝統的建造物群保存地区の区域が告示され、愛知県初の伝統的建造物群保存地区が誕生しました。地区内に所在する江戸時代から概ね昭和30年までに造られた伝統的な特性を維持し、足助の生活文化の変遷をよく表している伝統的建造物は、204棟あります。その中には、平成22年11月29日に豊田市に寄附された旧紙屋鈴木家住宅も含まれ、今後の保存・修理により、足助の町並みの核として活用していきます。

その後、豊田市伝統的建造物群保存地区保存審議会の答申を経て、平成23年1月31日に足助の歴史的町並みの保存について記した豊田市足助伝統的建造物群保存地区保存計画が告示され、町並みの保存が始まりました。これから足助の歴史的町並みを豊田市民共有の

財産として守るとともに、魅力ある地域づくりに活かすことで「足助らしさ」のあふれる町並みを住民の方とともにつくっていきます。

(多和田篤嗣)



足助の町並み(本町)

文化財シリーズ

75

県指定文化財
猿投神社文書
(猿投神社所蔵)

猿投神社文書は、三河国の大社、猿投神社に伝来した文書です。「訪古」「八講牒」「八講諸事文書」「貞和五年年中祭礼記」「伝燈」「澄誉伝受印信集」「豊臣秀吉朱印状」「尾

張国古図」が指定されています。

猿投神社文書は鎌倉時代から江戸時代にかけての史料であり、あまり判然としていない中世における神社組織や神社の様子を明らかにする上で非常に貴重な史料です。

特に「貞和五年年中祭礼記」には、神社の一年の活動が記録されています。その中には人々が食した料理や宴会の様子などが記載されており、当時の宗教施設における生活について多方面から分析できる材料を提供してくれます。

また4巻にまとめられた「訪古」は、承久の乱(1221年)の軍功により高橋荘の地頭職を拝領して以来、室町時代まで同地を領有した中条氏の関係文書が一括保存されており、中世政治史上の観点からみても史料的価値が高いといえます。



資料館 NEWS

12月23日・24日に「花もち」を作る大人向けと親子向けの講座を開催しました。



「花もち」は雪がたくさん降り、花が少なくなる厳しい冬に、作り出された正月用の飾り物です。木や竹や柳の枝に、色をつけたおもちを花のように飾りつけたもので、高さ30センチぐらいのものから3メートルほどの大きなものまであります。豊作を願い、福を招く縁起物として飾られました。昔は花もちを冬の間中飾って、ひなまつりになると枝から餅を外して油で揚げ、あられにして食べたそうです。

郷土資料館では11月頃から花もち講座に向けての準備が始まります。まず花もちの花器となる太い孟宗竹を切り出しにいきます。2年目以上の竹を選んで切るのが、中には虫に喰われて内側が真っ黒になって

いる竹もあったりします。土台となる竹の中には、上の花もちがぐらつかないように、竹でできた仕切りを入れてあります。この仕切りを1つ1つの竹の大きさに合わせてするのが最も骨の折れる作業ですが、庭園を管理しているスタッフが毎年行っています。郷土資料館の花もちは全て自然のものからできているところが自慢です。

花もちをつける枝は、枝振りが細かい方が見栄えが良いので、真竹という種類の竹の枝を使います。竹についている葉も全て取っておきます。

1つの講座を行うのにこれほどの準備が必要だとは、



参加して下さっている方には想像しにくいと思いますが、出来上がった花もちを喜んで持って帰って下さる姿を見ると、今年も花もち作り講座ができて良かったなあと気持ちになります。

利用案内

開館時間 9:00~17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)
入場料 無料(特別展開催中は有料)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.75 ■

平成23年3月8日発行
編集・発行 豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21
☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095
E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>
※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。